

本紙夕刊掲載の「現代のことは」、7月から次の皆さんに執筆していただきます。引き続きご愛読ください。

現代のことは

来月から新執筆者

安部龍太郎(歴史作家)、稲岡重里子(写真家、本家尾張屋16代目当主)、今井健介(京都教育大准教授・昆虫生態学)、岡田尊司(岡田クリニック院長、山形大客員教授・精神医学)、小川美代子(淡交社上席執行役員・編集局長)、小倉紀蔵(京都大教授・東アジア哲学)、片山九郎右衛門(観世流能楽師、川瀬慈(国立民族学博物館助教、映像人類学・アフリカ研究)、川本三郎(評論家、岸田繁(ロックバンド「くるり」のメンバー、作曲家)、吉良厚子(京都府介護支援専門員会事務局・ケアマネジャー)、坪場よしみ(編集者)、國賀由美子(滋賀県立近代美術館専門学芸員・日本絵画史)、佐伯啓思(京都大教授・社会経済学)、笹田昌孝(滋賀県病院事業庁庁長、滋賀県立成人病センター総長)、佐野玉緒(銀閣寺照花方・珠寶)、澤田美恵子(京都工芸繊維大教授・言語学)、柴山桂太(滋賀大准教授・経済思想)、ジョン・フリーン(国際日本文化研究センター教授・日本史)、末次智(京都精華大准教授・琉球国文化)、高村薫(作家)、内藤正典(同志社大教授・現代イスラーム地域研究)、中井均(滋賀県立大教授・日本考古学)、西倉一喜(龍谷大教授、中国政治・東アジア安全保障)、野村誠(作曲家、日本センチュリー交響楽団コミュニケーションプログラムディレクター)、橋本裕介(ロームシアター京都、京都国際舞台芸術祭各プログラムディレクター)、早島大祐(京都女子大准教授・日本中世史)、広上淳一(京都市交響楽団常任指揮者兼ミュージック・アドヴァイザー)、福岡良明(立命館大教授・メディア史)、藤井光(同志社大准教授・現代アメリカ文学)、ふしはらのじこ(絵本作家、堺町画廊オーナー)、藤原辰史(京都大人文科学研究所准教授・農業史)、松尾智晶(京都産業大准教授・キャリア教育)、御厨貴(国際日本文化研究センター客員教授・政治史学)、村本邦子(立命館大教授、臨床心理学・女性学)、森清顕(清水寺執事補、森脇清隆(京都文化博物館映像情報室長)、山室信一(京都大人文科学研究所所長・法政思想連鎖史)、矢守克也(京都大防災研究所教授・防災心理学)、養老孟司(京都国際マンガミュージアム館長) 敬称略・五十音順

現代の ことば

まつお
松尾
ちあき
智晶



先日、人事管理職の女性とミーティング中、「わたしは思春期に、答えのないことをもんもんと思い悩んでいた」という話になった。自分は何者で、どう生きていけばよいのか、この世では一体何が正解なのか、真剣にもんもんと悩んだ日々。

ハウツー本より、哲学や歴史、宗教や文化に関わる深いテーマの書籍を読み散らかし、答えを必死に探した。やがて進路選択のとき、自分の答えにしがたい迷いながら一歩を踏み出した。自分をほんの少し褒めたいような、不安だけれど誇らしいような気持ちになったのを覚えている。

生きていくための答えは『与えられる』ものではなく自分で『出す』ものだと感じた。この世には絶対的な答えなどないと知った上で、不安を抱きながらも自分の意欲で人生を生き始めた実感が確

もんもんと 考える価値

かにあった。

ふと、彼女の表情が曇った。「でも息子も含めて今の高校生には、もんもんと考えている様子があまりみられない」。大学選りも、何の疑いもなく反発せず、偏差値と適職テストの結果に素直に従うの。自らが悩み考えることなく、データで与えられた答えに即従う姿に不安を感じたという。

「どうしたらいいですか」

と学生はすぐに尋ねてくる。私もその昔、同様に問うた。されど、答えとは『与えられる』ものか、『出す』ものなのか、考え方の違いで問いの内容や問い方は変わる。質問をするときは、自分の考えや意見も述べてほしい。ところが彼らはまず先に『正解』を聞きたがる。その姿勢では、答えのない世界で自らが答えを出し、行動する力はつかない。

しかし若者が『答え』のないことをもんもんと考えなくなり、与えられた『答え』を即、素直に受け入れているとしたなら、その原因は私たちにもあるのではないか。

中国の格言は、魚を与えることは魚の釣り方を教えることに及ばないという。しかしそれは「本人が初めは釣りに失敗すること」や「本人がどう釣ればいいのか、もんもんと考える間、待つこと」を許容する考えの下に成り立つ。釣るのに時間がかかるから、うまく釣れないから、効率が悪いから、と代わりに釣ってあげてばかりいると、本人に釣りの力はつかない。

家庭や学校や社会で、私たちは彼らに「釣り方」を教えるのか、「魚」を与えているのか。

ときには指導に反発し、上手いかなって非効率にもんもんと考え、しかしそこから学ぶ姿勢が見られるならば失敗や試行錯誤を歓迎する。このような周囲の人々の態度が、若者を成長させるのではないか。答えのない世界で自分なりの答えを出し、歩み始める勇気をもててくのではないかと。自らの釣り方を体得できたと実感すれば、不安な朝でも「なんとかなる」と勇気を出して、若者は漁に向かうだろう。

反抗期のない子どもが、珍しくないという。日本の若者の自己肯定感は、先進国の中で突出して低いという調査結果がある。答えのない世界で、「もんもんと考える」価値をあらためて見直してみたい。(京都産業大准教授・キャリア教育)

現代の ことば

まつお
松尾

ちあき
智晶

私の母は5人姉妹の末っ子。かなりタイプの違う伯母たちの中で、私の『第3の母』ともいえるのが次女(上から2番目の姉)である。近所に住んでいた彼女は経営者の妻であり、幼い私に多くの体験をさせてくれた。京都・南座での歌舞伎の顔見世や温泉つきで観た宝塚歌劇、祇園のお座敷鉄板焼きやフランス料理の夕食など、子どもがここにいていいのかしらと緊張する

初体験の多くは彼女と一緒だった。私がいつどこでも、恐れずに一人で行動できるのは彼女の影響が大である。一方、母は末子で、明るく人あたりは良いものの自ら一人で出かけることは少なく、誘われたら乗るタイプ。器用な何でもこなしてしまうので自宅に人を招き楽しく日々を過ごす専業主婦である。人の誕生日や日常の出来事を驚くほど細かく覚えていて、

第3の母



細やかに配慮し小さな思いやりをさりげなく渡す。動植物の世話が大好きで、いつの間にかものすごく大きく育ててしまう(結果私も大柄である)。そこで自分自身を振り返ってみると、人付き合いや余暇の過ごし方に伯母と母、両方の影響を感じるのである。両者の価値観のうち私自身が親和性を感じる部分を取り入れて、自分が出来上がっていることにあらためて気づく。

さて学校卒業後、社会に出て、一人暮らし、転職、起業、結婚後の大学院進学など、はなはだ想定外のライフキャリアを形成してきた私である。その折々の節目において母は心配し親身にアドバイスをくれたが、それはそのとき私が必要としていたものではなかった。思いやりはありがたかったが「私のしんどさをわかってくれない」ことに、悲しくなり苛立った。母が知らない世界にいた私は、母が知らない不安をぶつけていたのだと思う(誠に申し訳なかった。しかし、必死にもがくうち、周りの人たちの母のようになまきしがあることに気づいた。母のように直接的でなく、距離も遠かったが、確かに私を温かく見守ってくださる方がいた。「これでもいいのか」と人生の節目で迷う私を支えたのは自分自身の社会的役割に近い、先輩方とも呼べる女性の「母」のような存在は、家族親族を超え拡大する。社会的ネットワークに関する「弱い紐帯の強み」という説では、新規性のある価値の高い情報は、どちらかといえば弱い関係性の人から得られることが多いという。母と大いに異なる私のライフキャリアが形成できているのは、これら『第3の母』のまなきしに気づき、関わり、ことをもらったおかげである。(京都産業大准教授・キャリア教育)

現代の ことば

まつお
松尾
ちあき
智晶

キャリア形成に関する講義で、「人生最大の意思決定」についていろいろな大学の学生に考えてもらった。多くは「大学進学すること」が最大の意思決定でした」と回答するが、近年気になるのが「人生最大の意思決定は、まだしていません」という答えだ。

では、あなたの行動は、誰が意思決定したのか。大学進学の場合「偏差値がちょうどそこだったので」「先生に勧められたので」「親にその大

志、低くない？



思えなければ、意思決定の後、起こったことについて自分がなんとかしようと頑張れるだろうか。「そう決めさせられたから」と他責的になる可能性も、はらむのではないか。

大学生がなす意思決定で、おそらく最大のものは卒業後の進路選択である。多くは、就職活動をおこなう。これについて、非常に強い危機感を感じた話がある。

活動をしている学生がいた。その学生は「誰もが知る有名な大手企業ではなく、あえて、その大手企業と長期間の取引が続いているメーカーや地域の信頼があつた販売会社に応募していた。派手さはないが必ず約束を果たし友人からも信頼される、実直な自分のキャリアクォーターと向き合った上での意思決定である。応募した企業をみて私は感動した。いずれも知名度は高くないが、手堅く経営をおこない着実に成長を果たしておられる、素晴らしい企業である。その学生が自らの特性に合った企業を、丁寧に探し選んで応募している様子がうかがえた。

ところが、その学生が友人に応募している社名を伝えると、「言いたいわね」という。「志、低くない？」

「志、低くない？」

私はそれを聞いて、強い衝撃を受けた。その発言を責める気持ちはないが、その考え方は実に危うい。有名な大手企業に応募しないことを「志が低い」というなら、応募することこそ「志が高い」と考えているのであろう。有名な企業で働くことは「良い」、そうでなければ「良くない」と思っている感じがする。しかし就職活動はその企業で働きたいと思えるかどうか、そこで働く適性が自分にあるかどうかで判断するものだ。さらに

社名の知名度は、働く価値とは無関係である。

企業選別に、偏差値は存在しない。インターネット上での企業にも容易に応募できる時代だからこそ、その意思決定は非常に難しい。思い込みにとらわれ、不安で自らの意思決定ができず、就職活動が進まない者もいる。

幸いその学生は、言われたことをまっとう気にしていなかった。「そうかな?」って言い返したんです」と爽やかに笑い、最終的には自分の志向性に合う企業から内定を得て、大いに満足できる就職活動を終えたようである。

(京都産業大准教授・キャリア教育)

現代の ことば

まつお
松尾
あき
智晶

おもわず口から言葉がふつとこぼれ出てしまうほどに、満足したり、安心することがある。私たちは美味しいものを食べた「おいしい」と言うが、それを超える瞬間だ。たとえば冷え込みが強い冬の日、生姜の効いた照りの濃いサバの煮付けに、炊きたて熱々のごはんが湯気をもつように立ててお茶碗にこんもりと盛られてくる。横には大ぶりの柔らかな大根とお揚げ、かつおの出汁が香るお味噌汁。そこには「おいしい」を超えお魚とご飯、おつゆをほおばると、われ知らず一言つぶやいてしまうことがないだろうか。

「……まちがいない」
そのとき、私たちの表情はゆるんでいる。言葉がでなくても、おもわず「……ふー」と息がもれてしまう。全身から自然に力が抜けて、温かい幸せ感でふんわりした心持ちになる。ああ、いつもの、安心できるものにたどり着いた、という実感がうきさせる。そこには「おいしい」を超えた何か加わっている。

まちがいない



京都に桜の名所は多々あるが、私は平安神宮の近くに咲く、岡崎・疎水べりのソメイヨシノがお気に入りである。一輪一輪の小さな桜の花が、密度濃く枝に咲き誇り、まるでふわふわのボールのように見える。東京から来た親友は枝を見上げ、「ボンボンの桜……」とつぶやいた。旅にはカメラを手放さない彼女が、その時撮影を忘れた。それから時折、4月に京都へ来る。岡

崎の桜を見る横顔は、撮影を忘れていたあの表情と同じである。彼女は、きれいな桜をみる花見以上の、何かに触れるために京都へ来るのだと思う。

日々せわしなく時間が過ぎる中でストレスが強くなりすぎると、私たちの身体はこわばって筋肉が硬くなる。しかしこれはある意味健全な反応で、太古の昔に私たちの生命が今よりもっと激しく危険にさらされていたころの名残だという説がある。危険を感じたらすぐ次の行動に出られるように、筋肉が緊張状態になり、血中酸素を増やすため呼吸が速くなるのだという。しかし、緊張した次には弛緩し

なければ、糸もゴムももっと丈夫なものもこわれてしまう。それは目に見えない「こころ」も同じではないだろうか。

悩みが胸の奥に居座るとき、何十回も読み返す文庫本。未来を不安に感じたら、見上げに行くツインタワー。疲れが重さをまといだしたら、足が向くお店。たとえば、家族で丁寧につられる一口わらび餅。路地の奥に潜む、香ばしいべた焼き。日中の社長業と店主を両立される、清潔な空気が流れるシャンパーニュのバー。常に研究を続け、毎回驚くべき肉料理を供する料理店。必ず向かって右側の店舗に入ってしまう、神社参道のア教育

あぶり餅屋さん。深夜でも最上の料理とワインを出す地下のイタリアン。急ぎに、即似合う服を勧めてくださる洋服店。

まちがいない、いつも安心し信頼できるものを大切にすることは自分を取り戻し、いつくしむことと同義ではないだろうか。先日、京都の特別なカフェ「ほんやろ洞」が焼失した。10代から、折にふれて向かうお店だった。現場をみて、胸の一点が突き刺さるような痛んだ。大切なものは、永遠の存在ではなく変化する。喪つて初めて、その存在の大きさに気づく。(京都産業大准教授・キャリア教育)

現代の ことば

まつお
松尾
ちあき
智晶

サクラサク、である。今年、京都の桜は少し早めに急いでひらき、雨や花冷えの気候にも負けず長くその美をたもってくれた。さまざまの国からいらしたであろう外国人観光客が、満面の笑みでカメラのシャッターを切っておられる姿が印象的であった。わが大学の入学式も、構内のあまたの桜に彩られる。制服や和装、スーツに身を包んだ学生と保護者の方の並ぶ姿が駅にあふれ、彼ら彼女らの緊張感が目

入学式とキャリア形成



にかこの年(退官)になったよ」と実に楽しそうな笑顔で話していたのを思い出す。実父は経営者であり、事業を営むリアリズム家庭で育った私には、なんともスケールの大きな、少し浮世離れた世界に感じられた。新たな知を生み出すって、どういうことだろう? どうしてそんなに楽しそうに、研究のことを話せるのだろうか?

新入生にとつての大学を私が表現すれば、「キャリア形成を、自らの方針によつてはじめる場所」である。キャリア、とは本来「就職」とか「就活」「出世」という意味ではない。語源は、馬車の轍、つまり車輪の跡のことである。私たちが人生で果たす役割や立場、得た経験すべての蓄積が、キャリアである。働くことが、キャリアである。働くことが、学ぶ、暮らす・生活を楽しむ、も含めて私たちは日々キャリアを形成している。これを虹のようであるところへ、生まれてから死ぬまでにひととは一般的には八つの役割、すなわち子ども・学生・市民・配偶者・親・家庭を営む人・余暇を楽しむ人・働

く人、の役割があると表現した心理学者がいる。それらには与えられるものと、自分でえらびとるものがある。ところで、大学入学の直後には『科目の履修登録』をせねばならない。この時期、どの大学も相談窓口が長蛇の列となるのが珍しくない。新入生はこの曜日時間にとり科目を履修したいのか、自らがえらぶ必要に迫られる。

「どれがいいですか?」と問うと、「あなたはどつしたいですか?」と逆に問いかけられる。絶対的な正解のない世界で答えを探す、自分なりの方針を立てて過ごす日々。これを、自由でわくわくする、楽しいと感じられるようになるのが、大学での学びであり、主眼的なキャリア形成の始まりといえる。それは社会がいかに変化しても無刀感に負

けることなく、自分らしく生きる力を身につけることと同義である。世俗から少し離れたところ、先達の考えをじっくり吟味し現状を理解した上で、自らの考えを表すのが大学教育であり、大学生活である。

最後に、キャリア教育は、就職活動の対策と矮小化して理解すべきではないとお伝えしたい。その定義は「個人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育」であり、本来すべての教育を包括する概念ではないかと、私はとらえている。

(京都産業大准教授・キャリア教育)

現代の ことば

まつお
松尾 智品

就職活動を舞台に人間模様を描いた作品が直木賞を受賞。ひとがどこかのタイミング

で自らの生き方を選択する時代だ。大学の入試広報でも卒業生の就職率が喧嘩と、そのために情報をあつめ、方向性を模索し試行錯誤するのは、本来ふつうのことではないだろうか。しかしそのことを過大に表現して不安を

おこし、ビジネスの種を不自然に大きくしすぎてはいないか。その結果、実態を知らない若者が、働くことや企業・組織に対して過度の不安感や恐怖心を抱く。社会で自律的に生きていくことに、無力感

就職活動はふつうのこと



を感じたり意欲をもてなくなるとしたら、大いなる社会的損失である。ある大学の調査では新入生の約6割が「就職活動に不安を感じる」と答えていた(入学したばかりなのに！)。

社会のどこかに身をおいて誰かと生きる選択を、自らがおこなうのはふつうのことである。しかし、社会人との交流が少ない若者は就職活動を「試験」のようにとらえる傾向が強く、どこかに合格対策があると誤解しがちだ。さら

に、採用・不採用を合格・不合格だと思つと、不採用のとき自分そのものを否定されたように感じて非常につらい。社会人としてあなたは「不合格」だ、と断じられたようにとらえてしまうのだ。この衝撃は、とてつもなく大きい。

機会が減っているなら、就職活動は「特別なイベント」になつてしまいかねない。

24年前の私が、まさにそうだった。何件もの最終面接で「君が男性なら採用したけど」といわれ、この世に私を一人として迎えてくださる企業はないのかと深い絶望感に襲われた。あのときの自分に言つてあげたい、「企業は、一緒に働くひとを真剣に探しているだけなのだ。あなたは『当社には合わない』と言われただけで、ひととして否定されたわけでも『社会人として不合格』と点数つけられたわけではない」と。一方、社会人として適切な言葉つかいや気づかい、ふるまいができる、採用に近く、これを「明確化できない基準であり、その基準をつかめない者にとっては新たな職務能力差別につながる」とする指摘もある。しかし、これも「合格・不合格」につながる考え方ではないだろうか。

本来ふつうのことである就職活動は、社会人と接し、話をし、社会を広く見聞きして、自分の身のおきどころを探してゆくプロセスである。しかし、そもそも、家族、地域、学校で「いかに働き、日々を過ごし、生きてゆくか」を話す